

小品系般若經について

鈴木 健 太

1. はじめに

諸々の般若經の中で、何が最古であるかについては古くから論じられてきたテーマである。特に、小品系と小品系の先後関係については千年以上に及ぶ長きにわたって議論されてきた。この論争は二十世紀になり、梶芳光運が小品原形説の妥当性を綿密に論じ、干潟龍祥が大品原形説を撤回したことでようやく決着がついた。現在は、小品系の諸本を比較して、その発展過程を明らかにしようとする研究が盛んになされつつある。

さて、小品系最古の完本である『道行經』は、梵文八千頌等の新しいバージョンと比べて章単位で不足している部分があるわけではない。しかしながら、少ない研究者が、その中でも、どの章、どの部分が先に成立したのかという点を明らかにしようと試みてきた。小品系般若經には二度の委嘱が見られることから（『道行經』で言うと、累教品第二十五、嘱累品第三十）、第一の委嘱で一旦經典が成立していたのだろうという推測がなされ、その点については多くの研究者に認められてきた。しかし、その他の点について、研究者の考えは一樣ではない¹⁾。従来、小品系の成立過程をめぐる諸説の結論については様々に言及されてきたが、各説の根拠を詳細に問い直すということはほとんどなされてこなかった。そこで、本小論では、従来の代表説の根拠を確認しつつ、般若經の古層をめぐる、穏当な見方を示していくことにしたい。

2. 代表説の整理

まず、代表的な論者である梶芳と干潟の見方を整理しておきたい（章番号は『道行經』による）。

梶芳説：第一段階（初品²⁾）⇒第二段階（第 2～第 26 品が加わる）⇒第三段階（第 27 品以下が加わる）

干渴説：第一段階（初品～第25品（但し第16品，第24品を除く））⇒第二段階（第16品，第24品，第26品が加わる）⇒第三段階（第27品以下が加わる）

3. 梶芳光運説について

梶芳は『道行経』初品が般若経の原型であることを示すための根拠を経典の記述に基づいて三つ挙げている。まずは、これらについて検討を加えることにする。

3.1. 根拠1: 第2品に「初品に基づくべき」との記述がみられる

一つ目の根拠について、梶芳は以下のように述べている³⁾。

さらに経典に依るならば，第二章天王品中には（筆者注：梶芳は『道行経』，『放光経』，『小品経』，『大品経』，梵文八千頌，梵文二万五千頌の経文を引用しているが，ここでは省略する）と須菩提品を指示している．尤も『道行経』では「須菩提に問うべし」と称して，須菩提の般若所説を俟つのである．これは『摩訶般若鈔経』も同じく唯「当問尊者須菩提」となっている．しかし『大明度経』は「於善業明度品中求」となって放光系と同一である．さらに『大品経』『小品経』何れも放光系と同じく須菩提品を指示する．然るにこの指示せられる須菩提品はまず，『道行経』の中に求むるに，「第一道行品」となっていて，須菩提品と命名するものは存在しない．さらに『大明度経』『摩訶般若鈔経』『小品経』等何れも初品を須菩提品とは言わない．けれども『大般若経』第三会及び第五会には何れも須菩提品と命名する一品が存し，梵文二万五千頌にもまた Subhūtiparivarta が存在する．されば，この立場からは第一章を須菩提品とすることが出来る．たとえその品題が「須菩提品」として，『道行経』の如く命名存在していないにしても，尚且つそれは須菩提所説に依るべきことを説いているのだから，初品に基くことが知られる．（梶芳 1980: 569-570）

ここで梶芳が言わんとするところは，「第2品で須菩提品（＝初品）に基づくべき」と述べられているのであるから，初品はそれより前に成立したはずであり，原形である」ということであろう．しかし，果たしてこの第2品の記述は「初品に基づくべき」ということを言っているのだろうか．

梶芳も指摘していることだが，『道行経』は「須菩提に問うべし」（大正8巻430b16-17）と言っており，「須菩提品に基づくべき」とは言っていない．『摩訶般若鈔経』も同様である．一方，梶芳も指摘するように，『大明度経』には「善業明度（＝須菩提波羅蜜？）品の中に求めるべし」（大正8巻483b2）との記述がある．しかし，『大明度経』は，原典を見て作ったわけではなく，『道行経』を漢語として読みやすくした“焼き直し”の作品であることが明らかにされている⁴⁾．だとすると，元来は「須菩提に問うべし」であったと考えるべきであろう．

次に，これも梶芳が指摘していることだが，小品系の多くは，初品が「須菩提

品」となっていない。小品系のそれぞれの初品の名称を示すと次のようになる。『道行経』：「道行品」，『大明度経』：「行品」，『摩訶般若鈔経』：「道行品」，『小品経』：「初品」，『大般若経』第四会：「妙行品」，『大般若経』第五会：「善現品」，『仏母般若経』：「了知諸行相品」，梵文八千頌：「Sarvākārajñātācaryāparivarta」。梶芳は、このうち『大般若経』第五会の章名に着目し、「初品」＝「須菩提品（善現品）」と主張しようとしているが、少し無理がある。古訳の章名を重視すると、やはり本来、初品の名称は「道行品（行品）」であり、『大般若経』第五会の初品名は後に変更を加えられたものと考えるのが穏当であろう。

また、梶芳は、小品系の『大般若経』第三会や梵文二万五千頌に「須菩提品」に相当する品名が存在することを指摘している（それぞれ「善現品」と「Subhūtiparivarta」）が、玄奘訳『大般若経』より前に訳出された『放光経』，『光讚経』，『大品経』には、「須菩提品」に相当する品名は見当たらない。ということは、小品系についても、小品系の初品に相当する箇所的一部分を「須菩提品」と言うようになったのは玄奘訳以降の後代のことであったということになる。

さらに、文脈を考えると、初品で説法を聴聞していない釈提桓因に対して、「般若波羅蜜を初品に求めるべき」と言うよりも、「般若波羅蜜を須菩提に求めるべき」と言う方が自然である。

最後に、梶芳は、初品の名称が「須菩提品」ではないとしても、「須菩提所説に依るべきことを説いているのだから、初品に基くことが知られる」と述べているが、須菩提は初品だけでなく他の品でも般若波羅蜜について説いているわけだから、「初品に基く」と断言することはできない。

3.2. 根拠2：弥勒菩薩が代表的な説法者となりつつある第6品で、須菩提が代表的な説法者として扱われている

まず、梶芳は『道行経』第6品の「諸四天王諸釈梵及諸尊天，悉承仏威神念諸千仏。皆字釈迦文。其比丘者皆字須菩提。問般若波羅蜜者，皆如釈提桓因」（大正8巻443b15-18），及び『放光経』第44品の対応箇所（大正8巻66c18-23）を引用した上で、以下のように述べた。

……「般若を説くものは皆須菩提と字く」⁵⁾と称するは、さきの「須菩提品中に求むべし」と説くものと対蹠して考え得る。……弥勒菩薩は『道行経』漚沱拘舍羅品第四に登場し、次いで不可計品第十一に兜率天上に般若を説き、人びとはその弥勒に従って来生すべきことが明かされ、後にそれは夢中の業を説くのであるから、既に須菩提はおのが地位を弥勒菩薩に譲りつつあると云わなければならない。そしてこの第二章天王品以下、すなわち『道行経』難問品第二以下は前後相承しつつ次第に発展しているものであったから、

弥勒菩薩に譲りつつあるこの部分に、須菩提の有する地位を特に甄別して見出すことは出来ない。出来ないとするれば、道行品に帰ってその地位を見出すよりすべはない。したがって此処にもまた須菩提品の先住することが指示せられていると考えなければならない。（梶芳 1980: 572）

ここで梶芳が言わんとしていることは、「第6品では弥勒菩薩が代表的な説法者となりつつあるにもかかわらず、ここで須菩提が代表的な説法者としての扱いを受けているのは、道行品（＝初品、須菩提品（梶芳による））における須菩提の地位に由来すると考えるほかない。したがって、第6品よりも道行品が先に存在していたことになる」ということだと考えられる。

しかし、この見方については、疑問がないわけではない。引用部の直前で釈提桓因に法を説いていたのは須菩提であるし⁶⁾、経典全体を見たときの代表的な説法者は須菩提である。したがって、たとえ第4品以降、弥勒菩薩が重要な役割を演じるようになっていたとしても、ここで須菩提が代表的な説法者として扱われることは不思議なことではない。

また、この箇所の記事が、道行品における須菩提の特別な地位を踏まえたものとしても、それが、道行品が先に、別に成立していたことを示すことにはならない。一度に成立した作品であっても前の部分の記事を踏まえて、後の部分の記事がなされるのは、ごく一般的なことからである。

3.3. 根拠3: 第8品に、経が展転していくことが示されている

梶芳は『道行経』持品第八の、般若経が南、西、北へと伝播していく様子を示す記述⁷⁾に言及しつつ、次のように論じている。

第二章天王品以下、すなわち『道行経』持品第八には所生処転に従って般若経が得られることを説き、経が展転して行くことを示す。すなわちこの経が仏滅後五百歳南方に在り、次いで西天竺に転し、西天竺より転じて北天竺に到る。北天竺において真に信解する者は少いが、広く行わるべしと云う。たとえ仏滅後五百歳云々が各経典に説かれて、流転に対する一つの型と見られるにしても、この型の背後に何程かの史実を想定しなければ、型の作られる根拠を明かすことは出来ないであろう。（梶芳 1980: 572-573）

梶芳は恐らく「般若経が南、西、北に伝播していったという記述は、この記述が加えられる前の般若経の原形が存在していたという歴史的事実を示すものではないか」ということを言おうとしていたのだと考えられる。たしかに、第8品の記述は何らかの原形が存在していたことを示唆しているのかもしれない。しかし、それが初品であるということは、第8品の記述だけでは判断できない。

(178)

小品系般若經について（鈴木）

3.4. 根拠4: 初品と第2品以降は対告衆が異なっている

梶芳は、經典の記述に基づくこれら三つの根拠を挙げる他に、初品とそれ以降の対告衆の違いに着目することで、初品原形説を示そうともしている。

即ち第二編第二章天王品以下は嘉祥大師も指摘する如く、三根人を対告衆とするものであり、したがって、科判も種姓品以下不退転菩薩品に発展しているのである。これに対し第一章須菩提品は、その立場と比較して言う限り、利根人を対告衆とするものであるともせられ得るのである。…（略）…このように先ず須菩提品とそれ以降とは相違が見出され、両者の間に区分が可能であると考えられる。（梶芳 1980: 568-569）

梶芳は、初品（須菩提品）と第2品以降は対告衆が異なっており、その内容も異なっているから区別されるべきであると考えている。さらに、このことを理由にして、初品が原形であると考えている節がある。しかし、対告衆の違いや内容の違いは、必ずしも成立時期の違いによってもたらされたものとは限らない。

3.5. 原始般若經の特徴

梶芳は以上の根拠について論じた上で、原始般若經として『道行經』の初品が示されたとしたら、それは『道行經』の第2品以降の内容を含むものでなければならぬとの考えを示した⁸⁾。つまり、最初に般若經の概要が成立し、それを基に第二段階で教えの詳細が説かれたというのが、彼の見解である。

しかし、こうした梶芳の見方には異論もある。例えば、荒牧典俊は、初品について「ひとつの総合・完成であるように考えられる」と述べ、初品の成立段階を遅くに想定する見方を示した⁹⁾。また、梶山雄一も「第一章はもっとも哲学的に発展整備されていて、これが最古の部分であるとは考えにくい」¹⁰⁾と述べ、この見方に疑問を投げかけている。

3.6. 小結

以上の考察から、梶芳説の根拠はそれほど強固ではなく、他の可能性を否定しきれないものとなっていると言えよう。

4. 干渴龍祥説

干渴龍祥は、初品には委嘱がなく、初品が単独の經典として使われた形跡はないとし、梶芳の説を斥けた。干渴の考えを簡単に整理すると以下のようなになる。

まず初品から第25品までをひとまとまりとして考えた。第25品に委嘱を示す文があるからである。しかし、『大般若經』第五会を見てみると、その第一の委嘱から離れた次の章の末尾に、「時薄伽梵說是經已、無量菩薩摩訶薩衆慈氏菩薩

而為上首，具壽善現舍利子等諸大声聞，并諸天龍健達縛等一切大衆，聞仏所説，皆大歡喜，信受奉行」（大正 7 卷 920b13-16）という通常，經典の末尾を示す言葉が登場する。また、『小品經』の対応箇所にも簡素であるが同じ効果をもつ文（説是法時，諸比丘衆，一切大会，天人阿修羅，皆大歡喜。（大正 8 卷 579b10））がある。第一の委嘱と「時薄伽梵説是經已……信受奉行」は本来直結していたのではないか。だとしたら，その間にある阿闍仏に関する記述は後代の挿入ではないか。さらに，阿闍仏に関する記述を含む他の章（第 16 品，第 24 品）も後代の挿入ではないか¹¹⁾。

干渴のこうした見方については，まず『道行經』等に「時薄伽梵説是經已……信受奉行」に相当する文が無い以上，それと第一の委嘱が小品系般若經において本来，直結していたかどうかは断言することができない。ただし，第 25 品中の第一の委嘱で一区切りになるという点については，多くの研究者も同意しており，その後の阿闍仏の記述が後に付加されたものであると考えることについては，特に問題は無い。しかし，それを根拠に，阿闍仏の記述を含む他の箇所（第 16 品，第 24 品）も後代に付加されたと結論付けるのは早計であろう。

5. おわりに

最古の漢訳である『道行經』には梵本等と比べて章単位で欠けている部分がない。これが現時点で最も確実な考察の出発点である。次に，經典の委嘱の記述は經典の終わりを示すという通例を踏まえると，第 25 品までで一旦成立していたということもほぼ確実に言えることなのではないだろうか。

一方，その他の観点から成立段階を区分する見方は，上記の基準に比べると確実性という点で劣る。このように考えると，現時点では梶山雄一が提言するように，「いまは第一～二十八章（筆者注：『道行經』の初品～第 25 品）が比較的古い部分である，と推定するにとどめておきたい」¹²⁾ という見方が最も穏当であると思われる。これまでの考察を踏まえ，現時点での結論を示すと以下ようになる。

第一段階（初品～第 25 品の第一の委嘱）⇒第二段階（第 25 品の第一の委嘱より後の部分及び第 26 品以下が加わる）

ただし，今後の研究によって，更に詳細な発展過程が明らかになるかもしれない。梶山の見方は，そうした更なる段階区分の余地を充分に残すものでもある。

1) 本稿で取り上げるものの他に，初品～第 3 品（など）を最古形と見る見方（平川 1989: 77, 三枝 1983: 102）などがある。 2) 梶芳は，初品の中でも特に最初の三分の

(180)

小品系般若経について（鈴木）

一ほどを最原始形態とする見方も示しているが、それについては「もちろんこの実体は、かつてあった歴史的現実とはその様相を異にするであろう」（梶芳 1980: 634）と述べ、理念的なものであることを示唆している。

3) 以下の引用文中の章名には注意が必要である。梶芳は般若経を再編成し、その内容に沿った章名を独自に新たに付しているからである。『道行経』初品から第 25 品に相当する部分について、第一「須菩提品」（『道行経』初品に相当）、第二「天王品」（『道行経』第 2 品に相当）、第三「種姓品」（『道行経』第 3 品に相当）、第四「新発意菩薩品」（『道行経』第 4 品～第 7 品に相当）、第五「久発意菩薩品」（『道行経』第 8 品～第 12 品に相当）、第六「不退転菩薩品」（『道行経』第 13 品～第 19 品に相当）、第七「総摂品」（『道行経』第 20 品～第 25 品に相当）の七章に再整理している。

4) 辛嶋 2014: 890-895. 5) この一節は、梶芳が直前で引用した『道行経』、『放光経』の記述とは微妙に異なる。恐らく『小品経』の「説般若波羅蜜品者、皆名須菩提」（大正 8 巻 552c17）という記述を踏まえたものであろう。

6) Karashima 2011: 192, 大正第 8 巻 443b10-13.

7) Karashima 2011: 224-226, 大正

8 巻 446a25-b3.

8) 梶芳 1980: 576.

9) 荒牧 1983: 92-95.

10) 梶

山 1976: 81.

11) Hikata 1958: xxxix-xxxv.

12) 梶山 1976: 81.

〈参考文献〉

Karashima, Seishi [2011] *A Critical Edition of Lokakṣema's Translation of the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* 道行般若経校注. Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XII. Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.

Hikata, Ryusho [1958] *Suvikrāntavikrāmi-paripṛcchā Prajñāpāramitā-sūtra, with an Introductory Essay*. Fukuoka: Committee of Commemoration Program for Dr. Hikata's Retirement from Professorship, Kyushu University.

荒牧典俊 [1983] 「十地思想の成立と展開」, 『講座大乘仏教 3 華嚴思想』, 春秋社, pp. 79-120.

梶山雄一 [1976] 『般若経』, 中央公論社.

梶芳光運 [1980] 『大乘仏教の成立史的研究』, 山喜房仏書林. (『原始般若経の研究』, 山喜房仏書林, 1944 年を増補改題)

梶芳光運 [1987] 「般若経に現れたるその原始形態について——特に最近の諸原形説をめぐって——」『梶芳光運著作集 東の智慧 西の思想』, 智山勧学会, pp. 3-26. (初出: 『宗教研究』新第 10 巻 5 号, 1933 年)

辛嶋静志 [2014] 「初期漢訳仏典の言語の研究——支婁迦讖訳と支謙訳の対比を中心として——」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』, 佼成出版社, pp. 890-909.

三枝充恵 [1983] 「般若経の成立」, 『講座大乘仏教 2 般若思想』, 春秋社, pp. 87-122.

平川彰 [1989] 『平川彰著作集第三巻 初期大乘仏教の研究 I』, 春秋社.

〈キーワード〉 小品系般若経, 『道行般若経』, 阿閼仏, 委嘱

(北海道武蔵女子短期大学准教授, 博士 (文学))